

アメリカの Thematic learning と Intergrated learning について

— Topsail middle school での研修から —

鳴門市瀬戸中学校 教諭 井原 晴 司

(1) はじめに

2002年度から、学習指導要領の改定により「総合的な学習」が実施される。本校でも、研究指定を受け昨年度から準備にかかっている。しかし、この「総合的」という「的」とは、なんだろうか。こんな素朴な疑問がわいてくる。またアメリカでは、テーマ学習が進み日本との「総合的な学習」と何らかの関連があるとよく聞く。鳴門地区で行われた事前学習会でも今回のプロジェクトの目的を総合的学習と位置付けていたように思う。

「総合的な学習の時間」の内容に関して言えば、①生徒の興味や関心に関する生活課題、②国際理解、環境教育、情報、福祉・ボランティア、健康教育などの横断的・総合的な現代の課題、③学校や地域の特色を生かした独自の課題などを学校の実態に応じて行うことになっている。学校によっては、教科との関連性をもたせながら、あるいは教科との関連性を持たせないで、行っているのが現状のようである。

本校でもこの3点を融合的に取り入れていこうとしている。しかし、教師も生徒も手探りの状態の中で、アメリカの実践事例や日本でも取り組まれている実践例を取り入れながら進めたい。また、教師自身も今までの生徒に対する評価や授業観では、なかなか成立しない中で、教職員の共通理解も不十分なままになりがちである。そこで、今回グローバルパートナーシッププロジェクトへの参加の機会を与えていただいたので、アメリカの総合的学習について私自身まとめてみようと考えた。さまざまな著書に触れる中でも、「Connected Curriculum」「Intergrated Curriculum」「Thematic Learning」などと言われ、これらの言葉が「総合的な学習」と訳されているようである。こういったことも整理され研修できたことは私自身大きな収穫であったように思う。

(2) 研修の概要

①参加者と配属校

私は、大阪のグループに所属し、ニューハノーバー

郡のウイilmington市のホテルに宿泊し、そこから約20分ぐらいの時間をかけ配属校に通った。メンバーは、大阪教育大学附属中学校岡本圭司先生と堅下北中学校の宇都宮進先生の3人である。配属校は、トップセイルミドルスクールである。トップセイルミドルスクールは、ノースカロライナ州ペンダー郡の南東の海岸近くにある。

②学校と地域

トップセイルミドルスクールは、生徒数400人程度の中規模校である。校区自体が広いのか、スクールバスの運転手だけでも18人いる。貧富の差が大きい上、昨年9月にハリケーン（「フロイト」というらしい。）の影響で、家をなくした人たちが増え、生徒数の約4～6割ぐらいがトレーラーハウスに住んでいるという状態である。保護者の識字率にしても60%という状態である。森林のあちこちにも爪あとが残っている。外国系住民はほとんどなく、災害などの復旧工事などの職を求めて集まった人たちにより、人口が増加してきている。そのため、新設校等もできている。施設設備では、田舎町ということもあって、他の学校で聞くようなコンピュータやテレビ設備などはやや遅れている。昨年度教員の一人が日本に派遣されてきたこともあってジャバンクラブというサークルが発足したばかりである。このあたりのウilmingtonだけで、日本人が50人ぐらいで、日本のことに興味関心は強いが、日本に関する情報は少ない。郡をあげて教育熱心な土地柄であり、教師自身のプロ意識が強い。また、隣にトップセイルハイスクールがあり、ほとんどの生徒がこの高等学校に進学している。

③日本の学校との違い

(ア) 学校の雰囲気

日本のように職員室はなく、各教科の先生が部屋を持つ。日本であれば、何年何組というような生徒の教室があるがアメリカでは、miles'sの部屋とか教師の部屋に生徒は授業ごとに各教室を移動する。子ども達は、廊下や各先生の部屋で休憩をとるがあまり話しをしない。時間帯によっては、生徒が整列して教室に入る場

合もあるが、教師も叫ばないし、校舎内を走ることもなく、生徒は自然に整列する。日本では、騒がしく整列順を決めていないとできないと思うが、トップセイルでは静かで整然としていた。

午後3時30分になると、スクールバスのエンジンが鳴り響くなか、子ども達は校舎に残っておしゃべりをすることもなくバスに乗り込み帰宅する。教師も帰宅する。午後4時になると、人影は見当たらなくなる。日本でいう部活動にあたるクラブ活動は、教師が指導しているが、一旦帰宅したあとに再び登校してくる。生徒たちは、クラブで指導してもらうために、教師に指導料を払っている。

(イ) 教師のプロ意識とチーム意識

教師の学年配属にしてもずっと同じ学年を持ちつづけている。教師は、その学年のプロになることを考えている。意外でもあったが、教師の服装もGパンはだめで、「プロならプロらしい服装をする。」ということで、金曜日のノーネクタイデー以外は、ネクタイにスラックスというフォーマルな服装である。そうすることが子ども達にとってもプラスになると考えている。そして、自らの集団をチームと呼ぶ。チームにより子ども達の教育をする。だから、その日の予定は、チームの教師が相談し決める。また、各教師の教室には、「ルール」が表示されており、このルールを守ることを重視している。子ども達が、守らなければ教科担任がすぐに指導するのではなく、教頭先生に報告する。教頭先生は、トランシーバーを片手に学校を巡回し、子ども達が授業中の態度が悪かったりすると子ども達と時間をかけて話をする。子ども同士のトラブルについては、生徒個々にカウンセラーが決まっており、そこに行き相談するよう助言する。家庭との連絡は、カウンセラーがする。あくまでも教科指導、ルールを守らせようとする。

また教職員の採用にしても郡が管理職を採用し、管理職が教員を採用する。日本のように現場の教師が管理職に採用されることはなく、マスターコースを修了してさえいれば、若い人でも採用されると管理職になる。だから、管理職ばかり続けている人もいる。また、管理職は、教員を年3回評価する。その評価の中で指摘された教員のかけているところを大学での研修によってカバーし、子ども達に生かそうと考えている。完全な分業をする中で、教育を実践する。また、月ご

とにベスト・オブ・ティーチャーを教師同士で投票し、賞品などご褒美をもらうようなシステムもあり、教師のやる気を出させる工夫もしている。

(ウ) スクールサスペンションと生徒指導

日本では、生徒指導上の問題を様々な教師が関わり、解決しようとする。特に、万引きなど法律に触れる問題などでも、教師が何らかの役割を果たす。しかし、アメリカでは、法律に触れることなどに、教師が関わること自体、保護者から裁判を起こされる可能性があり、警察の役割となる。また、生活の一般的な問題行動に対しては、「一日中口は利いてはいけない」「スクールランチを遅らせる」「教師が指定した場所で自習をする」など何らかのペナルティが課せられる。

(エ) 授業と学習形態

1コマの授業は、1時間30分であった。一斉授業の形もあるが、グループ学習やペア学習に重きをおいている。教科にしても特にコミュニケーションに力を入れている。日本でいう国語である。テーマ学習にしても、他の教科の内容と関連付けて言葉の学習をさせる。多民族国家のためであろうか、正しい英語の発音と言語力の習得に力を入れているため、専門のカリキュラム開発教師がいて、郡の中の学校を回っている。

成績の良い生徒については、やる気を起こさせるためにフィールドトリップといって、ビーチへ行ってランチを食べる。成績の振るわない生徒については、学校で学習を継続させる。

クラスわけは、生徒の成績によって3つに分けられる。郡の決まりであるようだ。飛躍するかもしれないが、郡の決まりということは、生徒の保護者も「子どものレベルはこれぐらいだから、このクラス（成績が良い子のクラスまたは、ふるわない子のクラス）でよい」と、どのクラスに入るかは保護者自身も指示していると考えられる。

(オ) 教師の給与

教師の給与は安い。たとえば、ベンダー郡の給与表によると、学部卒の最高額が、1月あたり3,859ドル（約424,000円税など込み）、マスターを修了した人でも1月あたり最高額が4,100ドル（約451,000円同じく税など込み）で、物価が日本よりも安いですが、それでも手取りになると20万少々といったところである。一家が食べていくには給与が安いので、ほとんどが女性の教員である。トップセイルミドルスクールでも、30人ぐ

らの教職員の中で、男性の教員が3人といった具合である。

④ Integrated learning と Thematic learning

テーマを設定し、学習していく授業では、厳密に言えば、教科の関連をより強くした「Integrated learning」と教科の関連性があまりない「Thematic learning」の2つの方法がある。しかし、その状況にあわせて両者の方法をまぜて取り入れているようであ

る。アメリカの教師集団が自分たちのチームの一人が一つのテーマを決めると、そのテーマに関わろうとする教師ができる。2～5人ぐらいで、それぞれの受け持ちの教科からそのテーマに迫ろうとする。(添付資料参照) 特に、コミュニケーションの科目を中心に進められている。コミュニケーションとは、日本でいう国語のことである。

⑤現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関 (所属・所在地・連絡先等)
3月27日(月) 8:30 to 9:45 9:45 to 10:00 10:00 to 11:15 11:30 to 1:15 1:15 to 1:30 1:30 to 3:30 3:30 to 4:00 4:00 to 5:30 6:00 7:00	Topsail Middle School	Tour of the Topsail Middle School and Topsail High School Campuses Break in Mrs. Broome's Office Attend the 8th grade Team Meeting Lunch Break Observation in 8th grade class Science Break Reception Reception Return to hotel	Mrs. Miles and Dr. Mintzes Mrs. Broome, Mrs. Miles Dr. Mintzes Mrs. Broome's Office Mr. Finnegan Mrs. Broome's Office Library at North Topsail Elementary School (Reading Association)
3月28日(火) 8:30 to 1:40 (8:30 to 9:00) (9:00 to 9:30) (9:30 to 10:00) (10:00 to 10:45) (10:45 to 11:45) (11:45 to 12:30) (12:30 to 1:00) (1:00 to 1:40) 1:40 to 2:00 2:00 to 3:00 3:00 to 3:30 3:30 to 5:00 5:00	Topsail Middle School	Observation in 7th grade classes Communications Academically Gifted Communications Science/Social Studies Social Studies Science Lunch Math Science/Social Studies Break Observations in Exceptional Children's classes Break Faculty Meeting Learning Styles Return to hotel	Mrs. Husemann Mrs. Moran Mrs. Jaeckal Mrs. Mewborn Mrs. Sander with 7th grade Mrs. Balusek Mrs. Jaeckal Mrs. Broome's Office Mr. Larson Mrs. Broome's Office Staff Development Mr. and Mrs. Miles

3月29日(水)	Topsail Middle School		
8:15 to 9:45 (8:30 to 8:45)		Observation	Wheel Classes
(8:50 to 9:05)		Computer Technology	Mr. Bryant
(9:10 to 9:25)		Art	Mrs. Hurn
(9:30 to 9:50)		Physical Education	Coach King
9:55 to 10:00		Band	Mr. Norvell
10:00 to 11:15		Break	Mrs. Broome's Office
(10:00 to 10:35)		Observation	In 6th grade classes
(10:35 to 11:15)		Math	Ms. Winters
11:30 to 1:40		Science	Mrs. Kite
1:40 to 2:00		Lunch	Mr. Wooten Mrs. Anderson
2:00 to 3:00		Break	Mrs. Broome's Office
3:00		Meeting	Mrs. Broome and Cindy Miles
5:00		Travel	In Topsail High School
		Return to hotel	

(3) 研修の結果と考察

子ども達のその日の時間割が教師のチームによって考えられ、各教科から一つのテーマに迫っていくという学習がなされている。一つの例として Topsail MS では、コミュニケーションの授業で、社会科で「中国」の文化大革命について学習した後、「Red Scaf Girl」という小説を読ませ、教師が子どもが習得すべき単語をインターネットで調べさせるという関連性のある学習を進めている。添付資料2が、生徒が実際に使っていたプリントである。County (カウンティ) の教育目標を達成するためには、どんな方法を用いても良いという条件と、教師自らが同じ学年の先生とチームを組みやすいという条件、それと教科の授業の融通性で、場合によっては、一つの教科を1週間続けて授業を行っても良いということである。また、常に教科の学習を生活の中に体験として取り入れられないかと考えている。数学でものの計り方や単位の学習をすると簡単なハウスを作り、実際に体験的にいかそうとする。また、2~3教科の融合もある。例えば、理科と社会で、理科で食物連鎖を学習し、社会科で環境問題を学習し、教科の融合を図る。これらのことができるのは、子ども達の時間割までもチームによってその日その日に考えられ、子ども達の教育に関わっていくという組織的なものもあると思う。子ども達も自分の教科書を持たない。だから各教科から一つのテーマに迫っていくという学習ができるのかもしれない。教師のチームの中で、チームをつくる。教師相互の連携の中で、行われ

ている。教師の子ども達への関わりが教科のみということから言えば、教師の話し合う時間も十分ある。また、大学での研修と教科に集中している。日本の場合では、教科の年間計画の目標があり、学年団、生徒指導、保護者への連絡など多様である。多様であるからこそ、場合によっては保護者や子ども達からも信頼され、場合によっては、教師の不十分性を指摘される。トップセイルは、完全分業を合理的に行っているが、そこには、「知識の習得が学校である。」「分業に責任をもてないものは、だめである。」といったことが伺える。アメリカの学校(もちろんすべてではないが)を目の当たりにすると、日本の学校では、「あらゆる機会に総合的に教育をするところである。」といった感じがしてきた。だから、テーマ学習にしてもアメリカの子ども達は、自分の責任を果たそうとする。日本では、教師と子ども達の関係からスタートするようにも思える。もちろん教科の年間計画の融通性、悪く言えばその教科独自の教科の柔軟性があれば、「今まで生徒に理解させたいが、教科書の内容を消化するために時間がない。」といった教科の内容を、それぞれの教科で出し合い、教師主導のテーマの中で生徒に学習させられ、体験的に考えさせたり、グループ活動の中で、知識を習得させ、生活に結びつけたものとする。そんな中で、さらに子ども達が主体的になるのではないかと考えられる。アメリカが個人の責任をベースとしているなら日本の場合は、教師と子ども達の間関係をベースに、教師の支援の一つとして、教科独自の年間計画から考

えていく必要がある。つまり教科内容の学ぶ内容の時期などである。ここで「子どもが主体ではないではないか。」といったことを質問したが、中学生の成熟度(判断や思考など)は十分ではないため、テーマ学習をする場合でもある程度の範囲の中で子ども達が選択し学習するという方法をとっている。例えば、トップセールではなかったが、海をテーマにした総合的学習をしていた。若い二人が恋愛をし、ヨーロッパに旅行をするという小説をコミュニケーションの授業で読み、子ども達は、教師から社会科でヨーロッパの国について調べ、理科で海の生物について調べるという Intergrated learning の方法が主に取り入れられていた。調べる地域や学習する内容に枠を設け、その中で、子ども達は、自由に内容を選択し、学習していくのである。

(4) 今後の展望と課題

春休みに入る時期であったため、一つの中学校では、3日間ではあったが、大変有意義であった。他のグループと少し違った予定ではあったが、分刻みでミドルスクールの授業や教職員の組織、子ども達の活動を観察できた。学校によって違いはあるが、アメリカの中学校はテレビや雑誌、インターネットによる情報などはかなり違っていた。今私が動めている学校現場にも、生かしていきたい。下記のような展望と課題をまとめてみたい。

展望としては、

- ① 総合的学習の研究指定を受けているが、テーマの設定と教科の関連性を図る。
- ② 日本の総合的学習とアメリカの Intergrated Learning、または Tehemtic Learnning の比較する中で、2002年からの総合的学習に生かす。
- ③ 中学生どうしの交流を図る。(文通またはインターネットなど)生徒の住所のタックシールを手渡した。またE-mailでの情報交換。

課題としては、

- ① 学校同士の交流については、継続した取り組みが大切。数回の学校訪問が必要。姉妹校の締結は、難しい。
- ② 言葉の壁を取り除くために、また研究内容をより充実したものにするために、やはり通訳の人が必要である。
- ③ ゆとりあるスケジュールであってほしい。
- ④ 個々のテーマが要求されるが、グループにより研究できないか。大阪・広島・徳島のそれぞれの教員の交流も必要であると思う。

(5) おわりに

アメリカは、よく自由の国と言われる。確かに、授業風景や生徒の活動を見ているとそんな感じもする。しかし、一方で様々なルールがあり子どもたちは、それを守ることを要求されているし、教師たちも裁判になった場合を想定して、かなり分厚い規則をまとめたマニュアルブックも出している。日本では、校則など簡潔化、子どもの自主性など言われているが、今回アメリカのテーマ学習をみて、子どもは自由に自分達の発想や気持ちを表現しているように見えるのと裏腹に規則を守らなければならないという義務に縛られているのではないかという感じもした。今、日本でも総合的学習を実施しようとしているが、子どもの自主性や興味関心を生かすためにも、各学校ともそれぞれ苦慮している。はたして、子どもが活動するのだろうか。学級崩壊や不登校などが言われている昨今、教師は、子ども達との関係を密にしながらも、適切な指導をしていく必要があると思う。教師の支援とは、何か、子どもの自主性とは何かを改めて考えていきたい。多くの収穫を得た中で、これからも交流を続けていきたい。

今回のような機会を与えてくださった方々に、そして現地でお世話になった大阪地区の方々に感謝申し上げます。この研究報告を終わりにいたします。

Name _____

Communist China _____

New China _____

Red Scarf Girl
A Memoir of the Cultural Revolution

Cultural Revolution

Mao Ze-dong

Capitalism

Feudalism

Four Olds

Proletarian

Mandarin

Shanghai

Central Committee

Red Guard

Red Successors

Chiang Kai-shek

da-zi-bao

People's Liberation Army

yuan

fen

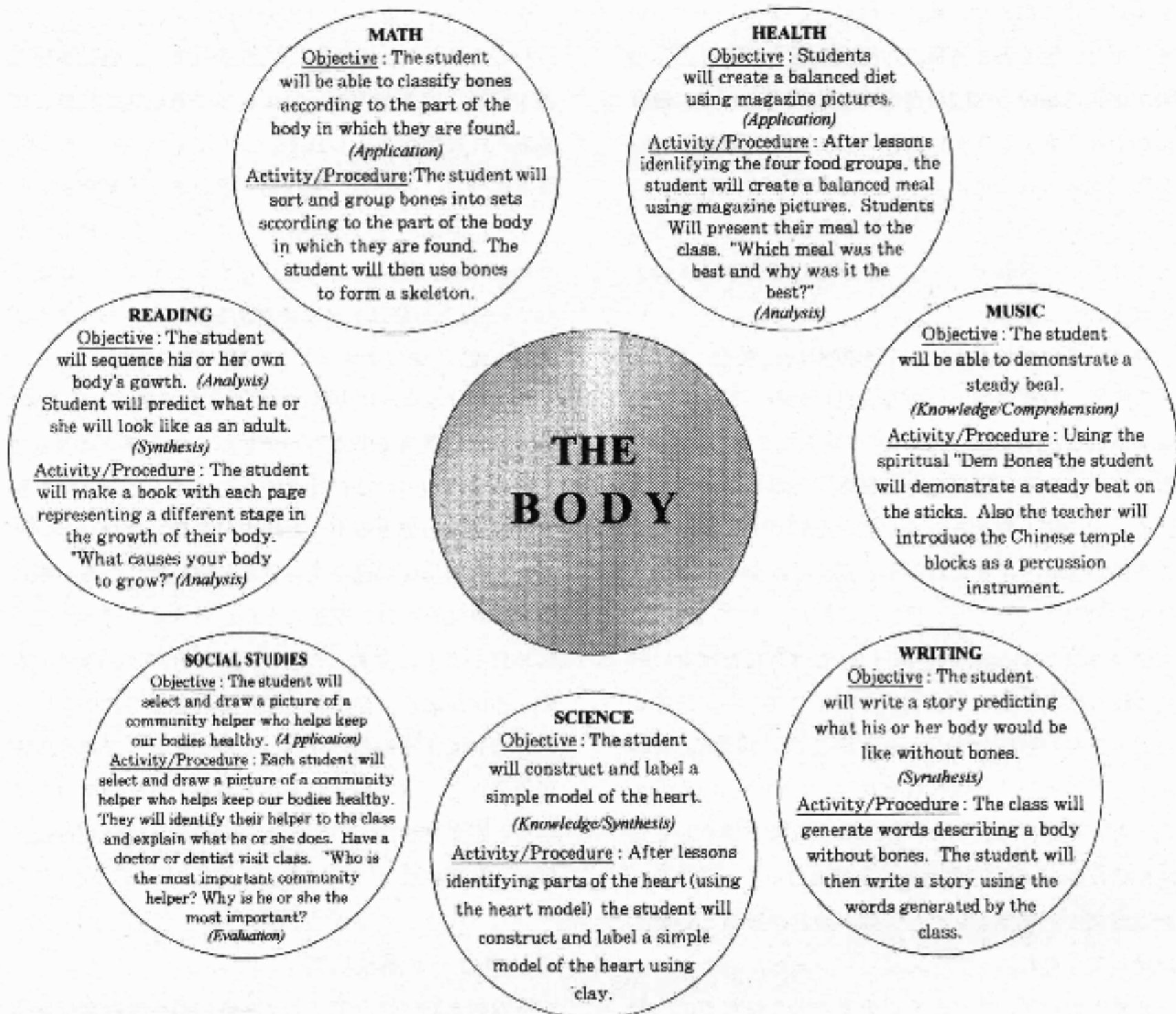
bourgeois; bourgeoisie

What were the duties of the head of the family in Old China? How did the values of family extend to Chinese society?

Give some examples of how Chinese art reflects traditions.

How did Mao change the roles of women in China?

Describe how education has changed in China.



日本はアメリカを向き、アメリカは日本を考える

大阪府立花園高等学校 教諭 蛭田 勲

1 ウィルミントンについて

ウィルミントンってどこにある。そもそもこの都市のあるノースカロライナ州の位置を正確に言える教師がいったいどれほどいるだろうか。ましてや結構詳しい地図帳でないと載っていないウィルミントンなど、かなりのアメリカおたくでないと知るはずもない。

北緯34° 西経78°、直前研修を行った新大阪からウィルミントンまで移動にかかった総時間、25時間。新大阪駅で関西空港行特急「はるか」を待っていたことなど遙か過去の如く。14時間の時差で朦朧とする私たちは日本の裏側に立っていた。感慨無量。

ノースカロライナの南部にあるこの町は大西洋まで車で10分。一年を通して温暖な気候で、町は木々の緑や美しい花であふれ、私たちの目と心を和ませてくれる。また、至るところ様々な様式の教会があり、この町が定年退職後の夫婦の理想的定住場所として、最近にわかにスポットライトを浴びだしたのも理解できる。街で見知らぬ人と目が会うと、みな南部の人特有の人なっっこい笑顔で「ハイ」と挨拶してくれる。こちらもぎこちない笑顔で「ハイ」。すでに十分アメリカナイズされているゾ。

教会が多いだけあって、日曜の朝は皆、教会へ行く。その証拠。日曜の朝、つまり安息日の朝、私たちは朝食を取れるCafeを探し求め、ダウンタウンを散々歩く。町を歩いている人間は私たち日本人だけだとすぐに気付く。どの店も軒並みジャッターを閉めている。今度こそ開いているんじゃないかと期待しながら、店を一軒一軒のぞいて見ても、日に入るのは、ドアに無造作に掛けられた「Closed」のプレート。もう今日は朝食にありつけないのかとやや絶望的な気分になりかかっていたとき、白い洒落たCafeらしき店のドアが開き、その中でウェイトレスとおぼしき女の子が動いているのが見えた。地獄に仏。その女の子がどれほど神々しく見えたことか。この店で食べたとっても甘いアイスクリームと彼女のチャーミングな笑顔が疲れた身体と心を十分癒してくれた。

必死の思いで、まさしく足を棒のようにして、一軒

の開いているcafeを探すのに街中歩き回ったのに、昼過ぎになったとたん、おそらくこの日にしか着ないだろうと思われるスーツやドレスに着飾った教会帰りの大勢の淑女紳士がどこからともなく現れ始めた。彼らの昼食をあてこんで、午前中はあんなに冷たく閉店していたcafeが「Closed」のプレートをあわただしく「Open」にかえだした。この見事なまでに手のひらを返したような態度。朝はゴーストタウン化していたこの町が教会帰りの人々ですっかり活気づいた。

テレビを見ても、私の「調査」によると11のチャンネルのうち3つは教会でのお説教を延々と流し続けるものだった。それぞれがどれほどの視聴率を取っているのか、実に興味が湧くところだ。

ダウンタウンから車で10分も行けば、大きな庭に州の花であるツツジが美しく咲き乱れている豪邸が建ち並ぶ高級住宅街がある。しかし1つ角を曲がれば、突然黒人住宅街があらわれる。この町でも住み分けが明確なようだ。ある黒人住宅街の家のポーチでデブりと太った老齢の黒人のおじいちゃんが、春のゆるやかな西日に目を細めながら、ロッキングチェアに揺られていた。その姿はアメリカ南部を描いたコールドウェルの小説、「タバコロード」を思い出させた。

食べ物はずすがに大西洋に面している町だけあって、sea foodは豊富である。しかし、レストランに入ってもその皿に出される料理は並みの日本人ではとても食べ切ることのできるような生半可な量ではない。レストランの店員が料理をテーブルに置く度に、その量に圧倒され私たちは、空腹にもかかわらず、思わず深いため息をつくのであった。料理のサイズもPetiteとRegularがあり、当然謙虚な日本人としては小さいサイズのPetiteを頼むのだが、そのサイズは日本人の常識で言うと、きっかりLargeである。私が現地の人に会うと必ず言う「You have no concept of smallness.」はいつも受けた。

2 ホガード高校にて

私の個人的プロジェクトは海外の高校と姉妹校提携

を結ぶ第一歩をこの学校に標すことであった。だから、ホガード高校に派遣される初日、気負うほどではないにせよ、「これを言おう、あれを言わなくては。」と、かなりテンション高く、心にはち巻をしてキャンパスにのりこんだ。最初に紹介してもらった校長先生とお互い気合いを込めて握手しつつ、「私はこの学校と姉妹校提携の可能性を探りに来ました。どうぞよろしくお願いします。」と最初のジャブ。「大いに本校を観察して、いろんな先生や生徒と話してもらって結構。」と、にこやかながらも眼光鋭き校長。ではお言葉に甘えてと、私の観察第一日目は始まった。

ホガード高校。9年生から12年生までの4学年、2,400人の生徒を抱えるノースカロライナでも2番目のマンモス校である。人種構成はWhiteが70%、Afro-Americanが25%、その他(Hispanic/Asian)5%となっている。その生徒数が異常に多い主たる原因として、①以前はミドルスクールに属していた9年生が今ではハイスクールに組み込まれていること。②ウィルミントンへの急激な人口流入、があげられる。生徒数に対して教室が足りないので図書館でも複数の授業が同時並行で行われている。休み時間には廊下は生徒であふれかえり、人にぶつかることなくまっすぐには歩けない。ランチタイムではカフェテリアは寿司づめ状態で、多くの生徒は校舎外で昼食をとっている。昼食後の中庭は昼食前とは全く様相を異にし、お掃除おじさんたちが、クチャクチャとガムを噛みながら楽しそうに、さも当然の如く散らかったゴミを拾い集めていた。そのような状況を市もいつまでも許しておくわけはなく、2001年には高校を1校新設するそうだ。

3 ホガード高校のスタッフについて

校長はもちろん1名。しかし Assistant Principal (副校長) は4名いる。副校長の役割としては、全州統一のWriting Testの指導(このテストのスコアは学校の「格」に関わる問題なので、テストが近づくと教員間ではこの話題でもちきりである。) 校内巡視、教員の評価などを担当している。私を案内してくれたカウンセラーのダミアンは以前新潟大学で教壇に立っていたこともあり、日本語はとてもうまく、私が英後で「副校長の一番たいへんな仕事って何?」と尋ねると、流暢な日本語で「そりゃ、校長になるための勉強をすることでしょう。」と思わず納得してしまう答えを返してき

た。彼らは生徒指導主事とともにWalkie-talkie(トランシーバー)を腰につけている。校内でWalkie-talkieを携帯している人を見かけたら、この人は偉い人なんだと認識しましょう。

日本の学校と決定的に違うのはスクールポリスが2名、カウンセラーが6名、生徒指導専門のカウンセラーが1名常駐していることである。また特筆すべきはDetention(懲戒)専門の教員も1名いることである。彼は身長が2メートルもありそうな黒人の男性で、私と話しているときはgentlemanなのだが、校内謹慎を受けている生徒の前では無口でその顔は決して笑うことはなく、絶えず腕組みをして鋭い眼光をどの懲戒生徒にも向けている。仕事中の彼の身体からは言いようのない無言の威圧感がオーラのように放たれ、あたりの雰囲気は息苦しいまでの緊張感に包まれる。

日本では厳しく生徒指導をすると、生徒たちは異口同音に「あぁあ、わたしらアメリカの学校へ行きたいわ。もっと自由やからなあ。」と、のたまう。私は言う。「そんなに行きたかったら、どうぞ行ってらっしゃい。きっと、こんなはずじゃなかったと思うから。」

4 ホガード高校の生徒指導体制について

生徒指導担当のカウンセラーとの話の中でよく出てくる technical term に detention (辞書で訳を見ると「罰としての生徒の居残り」とあるが我々高校の教師のイメージでは学校/家庭謹慎というところか?)

Detention へのプロセスは細かくマニュアル化されている。例えば授業中生徒が教師の注意を無視して騒いだとする。教師は彼にdetentionを宣告し、先に述べたdetention担当のBig manに引渡す。彼はその日一日Big manの監視の中、別室で無言の業を行いながら、勉強や食事をしなくてはいけない。授業中に私語をして先生に注意されている生徒に他の生徒が"Detention! Detention!"とはやす。よくある風景。その他遅刻1回目警告、2回目親を呼ぶ。3回目校内謹慎。家庭謹慎は喫煙3日、麻薬1年間(実質退学勧告か?)

印象に残るアメリカのアカウンタビリティ(説明責任)の一つに綿密な懲戒規定が生徒・保護者に文書として知らされていることがあげられる。Dress code(服装規定)をはじめとして事細かに規定されている校則集はカリキュラム表とともに文書化され、生徒・保護者に年度当初に渡される。学校の教育姿勢は常に保

護者には明らかにされている。

アメリカの学校を訪れる誰もが気付く日米の違いに校務の徹底的分業がある。教科指導の教師はそれだけに集中する。進路指導は進路担当のカウンセラーに、生徒指導はそれ担当のカウンセラーに、不登校の問題は常駐のボランティアであるソーシャルワーカーに完全に任されている。何でも屋の教師を理想とする日本とは大違いである。カウンセラーは各自の部屋が与えられ、中を覗くと常に生徒がいる状態である。ただ、彼らの大半はカウンセラーとのダベリングを楽しんでいる様子で、(もちろん中には悩みを抱えている生徒もいるのだろうが) ちょうど休み時間に担任のところへ生徒が四方山話をしにやって来る日本の職員室風景とよく似ている。

上で述べたように、ボガード高校では、教科指導の教師は教科を教えていけばいいのである。だから、授業が終われば、まさしく脱兎の如く帰宅する。授業が終われば2,400人プラス130名のスタッフが一気に帰るので、終業のチャイムが鳴ると、教師は取るものもとりあえず、急いで駐車場へ向かう。(ちなみにこの駐車場もハンパな広さではない。歩けど歩けど駐車場。) クラブ活動や校務のために夜遅くまで残ることを是としている日本の教師には、あの慌てて家路に急ぐ彼らの姿はどう写るのだろうか。

5 生きる力を育てる授業を見た

日本では新しい学習指導要領が告示された。その総則のなかで、各学校は創意工夫し特色ある学校作り、特色ある教育活動を展開することで生徒に「生きる力」を育むことが求められている。では、「生きる力」とは何ぞや? 文部省の先生によると、「自ら考え、学び、問題を解決する力」がその一つの例だそうだ。

また今回の教育改革の一つの目玉としてあげられるのが、「総合的な学習の時間」の創設である。この時間は科目横断的な課題を体験的活動を通して解決していくことで「生きる力」を育てることを主眼としている。小学校、中学校ではかなり実践も進み、全面実施への移行も円滑にいと聞いている。高校の現場ではまだ何をどうしようか右往左往しているのが現状である。ところがボガード高校の授業を見せてもらってびっくり。授業には、豊富な体験的活動が組み込まれていて、何よりもlearners-centeredな授業が多いこと

は予想以上であった。

ここで印象に残る授業を3つ紹介しよう。この3つの授業、いずれも日本人教師が10人観察すれば10人とも感銘をうけること間違いなし。これらの授業に参加している生徒たちの生き生きした表情を見て、自分の生徒たちも教室でこんな表情しているだろうかと反省させられた、そういう授業である。

まずはTV Production。

受講している生徒は10名程。日本では分掌、各教科からの諸連絡は放課後ショートホームルームで担任から伝達される。ボガード高校では校内テレビ放送がその役割をしている。この授業を受講している生徒は毎日1時間目に校内のスタジオで諸連絡を伝えるニュース番組を制作・録画し、2時間目の最初に全校放送する。生徒は各教室に備え付けのテレビでこの放送を見る。

ディレクター、フロアディレクター、カメラクルー、映像ミキサー、音声ミキサー、コンピュータアシスタント、それにアナウンサー2名と各自に一つ役割が与えられていて、毎日その役割はローテーションされていく、各自自分の役割をよく理解していて、生徒がその場その場で簡単なミーティングをしながら制作していく。見学したその日はカメラを扱っていた女子生徒がリーダーになり、あれこれと指示を出しながら番組を進めていく姿は印象的であった。先生の役割は制作中に簡単なアドバイスをすることと、授業の最後の反省会でコメントするぐらいで、番組制作は生徒の自主的判断と主体的な活動に委ねられていた。この授業の中での生徒間、あるいは生徒と教師との間の真剣なinteractionが私の目にはとても心地よかった。番組が進行している10分間はスタジオは緊張感に包まれる。その緊張感の中、生徒たちはよりよい番組を作るために動き回っている。収録が終了すると緊張から解き放たれた彼らの顔に安堵と充実の表情が浮かぶ。番外編として、はるばる20数時間もかけて太平洋を渡って日本人がやってきたというので、私もこの番組に出してもらった。視聴率100%を誇るこの番組の影響は大きく、行く先々で「テレビで見たよ。」「日本から来たんだろ。」と声をかけられ、ちょっとしたスター気分浸れた午前中だった。

自分の個性を発揮し、他の生徒と協調しながら1つのものを作り上げていくこの授業は、生徒に「生きる

力」を育てる授業としてのrole modelである。恐れ入りました。

このあとも「恐れ入る」授業にであった。

2つめはmusic。

コーラスを中心にした音楽の授業である。部屋は小さいながらも、階段教室になっている。生徒は36名。うち男子生徒は9名。みんな9年生ということでもまだまだあどけない生徒たちばかり。ところが歌いはじめると彼らは突然プロ顔負けの歌手に変身する。ディズニー映画の主題歌のメドレーを練習するが、そのハーモニーの美しさは無料で聴かせてもらっているのが申し訳ないほど美しいものであった。男性の先生の指導もエネルギーで、常に生徒の72の瞳はすべて先生に注がれていた。先生が私に「今、日本の歌を練習しているので、ひとつ聴いて批評してくれないか。」と頼まれた。「ほたる、こい」だった。

あまり期待はしていなかったのだが、誰が指導したのか、彼らの日本語の発音は極めて正確だった。「ほ、ほ、ほたる来い。あっちの水は苦いぞ。こっちの水は甘いぞ……たかちょうちん、てんじくあがりしたればつんばくらにさらわれべ……」(この歌にそんな歌詞あることを彼らから教えてもらった。)その美しい輪唱はまたもや私の心を溶かしていった。歌い終わり、彼らは私がどんなコメントをするか固唾を飲んで待つ。一瞬の沈黙。私は先生に負けにくいぐらいのオーバーアクションでひと声高く、「パーフェクト!!」。大爆笑と大拍手。彼ら32名の輝く笑顔がとても美しかった。日本の私の生徒たちも授業中にこんな充実感に満ちた笑顔を見せてくれているのだろうか。また反省。

そのあと日本についてのQ&A。どの授業を参観させてもらっても日本についての質疑応答が行われる。これ、定番。このコーラスの授業ではどうか質問がありませんように、と祈りながら参観したにもかかわらず、自然発生的にQ&Aが始まり、気がつけば、私は彼らの好奇心の大きなうねりに巻き込まれていた。しかし、残念なのは彼らの日本について持っている知識の貧弱さである。日本ではアメリカの情報など新聞を見れば必ず載っているし、多くの日本人がアメリカに関心を持っている。だが、アメリカ国内では私たちが期待するほど日本の情報は入ってこない。アメリカの高校生が日本について、ほとんど知識を持っていないのも当然である。大阪という都市の名前を聞いたこと

がある生徒は、どのクラスでも平均1~3名ほど。香港も日本の都市であると思っている生徒、日本はユーラシア大陸の一部であると固く信じていた生徒。この2つは典型的な誤解。・島国で人口が多い。・ヘルシーフードを食べている。・発達した科学技術、これらは彼らが日本に対して持っている3大イメージ。彼らの日本の高校生の生活に対する好奇心は旺盛で、「高校生は普段何を着ているの?」「日に何時間授業があるの?」「アルバイトは何をやっているの?」思いついたら次々手をあげる。一つ一つの質問に必死になって答えるので、答え終わる度に疲労感をおぼえるが、彼らの邪気のない、真摯な態度がとても嬉しかった。

もうひとつ私が「恐れ入った」授業、residence (住居)

この授業はレベル1とレベル2に分かれている。日本でいう家庭科の授業。レベル1ではコンピュータのCADを使い、住居設計を学び、割りばしのような材木で家の模型を作る。私のド肝を抜いたのは、レベル2。何と本物の家を建築する。しかも私の今住んでいる家よりはるかに大きな家を。この建築資材は市が買い与え、でき上がった家は低所得者に売却される。売却利益は市に渡され、それを資金に市はまた資材を買い与える。本物の家を作るという大胆な発想とこのお金の循環に、アメリカ人の合理性を見た。

これらの授業を代表とする私の魂を震わした授業は、実習科目であったのももちろんとはいうものの、体験活動が豊富に組み込まれ、learner-centeredであり、他の生徒と協調しながら、一つのものを作り上げていくまさに「学びがいのある」授業であった。それらの授業は今、日本で進められている教育改革がめざすモデル授業であろう。しかしその一方でアメリカはアメリカで悩んでいる。何人かの教師が私に語った。それは最後に述べたい。

6 ひとつ気付いたこと

いくつもの授業を参観して、ひとつのことが気になった。普通の授業では感じなかったのだが、アドバンスクラス(進学クラス)の授業になると、黒人の生徒の割合が、グッと低くなっている。そのことを何人かの先生に聞いて見た。カウンセラーのダミアン先生は、「実は、そこが私たちの学校の悩みなんだよ。9年生、10年生の頃頑張っていた子供でも、彼らの中には片親

の家庭が多く家庭の経済状況・教育環境や親の教育への無理解のためにアドバンスクラスを取ろうとしないんだよな。」

まだwhiteとnon-whiteの間には大きな溝は存在しているのか。一度生徒たちの意識調査してみよう。

7 何人かの生徒にインタビューして

司書のウッダード先生に何人かの生徒を紹介してもらい、インタビューをして見た。トピックは①卒業後の進路 ②尊敬する人 ③好きな科目 ④嫌いな科目 ⑤校則について ⑥人種問題について、の6つ。もちろんインタビューした生徒の数が少ないので、この結果を一般化するのには避けておく。

・James Jones (Boy/Afro-American/16)

①大学で、コミュニケーションを専攻したい。②両親 ③スペイン語 ④数学 ⑤厳しい。特に今年から導入された服装規定が最低! ⑥自分の祖先は西インド諸島から来た。90%解決している。自分も異人種の友達が多い。

・Nicole Carroway (Girl/Afro-American/15)

①大学でコンピューターを専攻したい。②両親 ③スペイン語 ④英語 ⑤厳しい。服装規定がいや。⑥全然解決していない。白人が頼んだらすぐしてくれることを自分が頼んでもなかなかしてもらえないことがよくある。奴隷制度も解決できたのだから、この問題もやがては解決できるかもしれない。

・Stacey Hoke (Girl/White/18)

①大学でマーケティングを専攻したい。②両親、とても信仰心が厚いから。③英語、数学 ④歴史 ⑤気にならない。服装規定もあっていい。⑥個人的には気にしていない。黒人の友達もいるし。でもアドバンスクラスには、黒人の生徒は少ない。地理的にはこの町は南部だが、人々の頭は北部。授業でも特に人種(問題)に関する授業はない。

・Jessica Pearson (Girl/White/17)

①大学でジャーナリズムを専攻したい。②両親、自分の生き方にとっても影響力がある。③英語、歴史 ④数学 ⑤厳しくてもかまわない。校内で銃の乱射などがあってはいけなから。⑥基本的に自分はリベラルだと思っている。しかし、黒人の生徒とは価値観が違う。住む地域も話す言葉も、生き方も違う。

・Chris Bradley (Boy/White/17)

①将来は軍隊か沿岸警備隊に入りたい。②祖父、りっぱな軍人だったから。③化学と歴史 ④数学、スペイン語 ⑤厳しすぎる。なぜ短いシャツがいけないんだい。⑥あまり話したくない。

・Shereeka Brunson (Girl/Afro-American/17)

①大学で農業を専攻したい。②母親、母一人で自分を育ててくれているから。③生物 ④英語・地理(覚えるのがたいへん) ⑤入学時より厳しくなっている。トラブルメーカーが増えてきているので当然かもしれない。(授業に遅れてきたり、授業中も邪魔をする) ⑥全然解決していない。みんな外見で人間を判断している。母は異人種間結婚には絶対反対。しかし時間はかかるだろうが、この問題はいつかは解決できるのではないか。

8 日本はアメリカを向き、アメリカは日本を考える

日本は今、戦後の知識の総計こそ学力という教育観の転換を模索しはじめている。そのモデルとしてアメリカ型教育がある。体験活動を豊富に組み込み、生きる力を育む授業。日本よりはるかに発達したメディア教育。校長のリーダーシップのもと特色ある教育活動を通して進められる特色ある学校づくり。学校の家庭、地域社会にたいして果たされる教育活動の説明責任。一見するとアメリカ型教育こそ理想の形であるように思える。偏差値を上げるため高度な知識を吸収することに全力を尽くす日本の子供たち。夜遅く、家路を急ぐ企業戦士たちと同じ電車に乗り込む整帰りの小学生。彼らを見てると、本来子供の特権である「ゆとり」がない。もっと学習面で彼らにゆとりを与えて、地域社会で持つ機会が少なくなってきた体験活動を学習の場で補っていくことが望まれる。アメリカに渡り、そのようなゆとりある学習活動を目のあたりにすると、思わずこれこそ教育の理想郷と思ってしまう。

しかしアメリカの教師も悩んでいる。何人もの教師が共通して同じ悩みを打ち明けた。それはアメリカの高校生の基礎知識、基礎学力の低さである。それは日本の高校生にもある程度は言えることだが、ある地理の教師が言うには、高校生の地理的知識は昔の小学生レベルで、テストはどうしてもその知識不足を補うために暗記型のテストに最近では傾いているらしい。また、この先生によると、アメリカの高校生は、ものを覚え

る忍耐が全く欠けているので、今では地理や歴史は高校では不人気科目のトップにランクされているようだ。私がインタビューした生徒の一人も地理は覚えるのがたいへんなので嫌いと言っていた。日本の教育の現状を話すと、アメリカの教師は異口同音にアメリカも日本の知識注入型教育をもっと取り入れなくてはいけないと言う。ノースカロライナの教育委員会の話しでは、まもなく卒業試験を導入するそうである。そのテストをクリアしなければ卒業できない。テストに課される科目も知識量を試す暗記主流の科目であり、これを見ると、アメリカの教育は日本型に少し傾いてきているのではないかと思われる。

9 アメリカで考えたこれからの日本の教育

日本の知識注入型・基礎知識暗記型教育というふりこもアメリカの個性重視・体験経験学習型教育というふりこも、極端まではねあがり、今お互いの方向に向

かって振れはじめたように思われる。日本もアメリカもこれまでの教育に行き詰まりを感じている。日本だけでなくアメリカも、よりよい教育の形を求めて、自分たちにないものを今、日本の教育に求めている。

教育に完全な形はない。確かに日本型教育は閉塞している。しかし根本的にそれを捨て去る必要はない。今までの教育課程の基準を少し緩和して、そこに体験活動を組み込む。日常の授業で培った基礎的知識を武器に、体験活動を通して学習内容をより深く理解する。そのような「学びがいのある学習」への教育の基調の転換が21世紀の日本の教育には必要であろう。

追記：花園高校とホガード高校は、2001年6月28日、花園高校にて、両校校長、職員、花園高校生徒有志出席のもと、姉妹校締結の調印式を行った。感慨。